

えひめの歴史文化モノ語り

県歴博収蔵資料から②

ダイナミックに描かれた石
鎚山や白帆とは対照的に、
麓に広がる西条藩松平氏3
万石の陣屋町は細かく仕上
げられている。

多色刷りの木版画は錦絵
と呼ばれ、江戸時代に流行
し全国に広まっていた。

パツと目を引く白い帆
と、その奥に悠々とそびえ
る四国最高峰・石鎚山。画
面半分を占める美しいグラ
デーションの空には、雁の
群れが飛んでいる。これは
歌川広重が描いた「六十余
州名所図会 伊豫西條」で
ある。手前にモチーフを大
きく描き、奥に余白を持た

せる構図は、広重が好んだ
描き方だった。

では、広重はどこからこ
の石鎚山を眺めたのか。実
描く絵師だけではなく、木

「六十余州名所図会 伊豫西條」

広重独自の石鎚山描く

は、広重は自身の目で石鎚
山を見て描いたわけではな
い。「山水奇観」という本
を参考に、広重独自の視点
を加えて描いたのである。

版を彫る彫師、そして紙に
摺(す)る摺師が協力して
出来上がる。絵柄によって
どおりの色合いを表現する
ために、精巧な技術で多く
の色を正確に摺り分けてい

が合った。

そして摺師は絵師の意図
をもっと知ってもらいたいと
思い、浮世絵摺り体験のイ
ベントを実施している。広

重の「伊豫西條」を、黄色

歌川広重が描いた錦絵「六十余州名所図会 伊豫西條」
11855(安政2)年製作、県歴史文化博物館蔵



・朱色・緑色・青色・黒色
の樹脂製の版木を用いて、
色が薄い順に摺り重ねて作
成することができる。

一色ずつ重ねるごとに絵
柄が完成する様子は面白
く、子どもだけではなく大
人も楽しんで体験してい
る。人によってインクの量
や摺る方も異なり、その出
来上がりは十人十色で見
て面白い。

また当館の特別展「夏の
歴博 おぼけ大集合！」(9
月2日)の期間中は、毎
週土曜日におぼけの浮世絵
を摺る体験イベントを開
いている。ぜひこの機会に自
分だけの浮世絵摺りに挑戦
してもらいたい。

た。浮世絵とは、絵師・彫
師・摺師の連携があつてこ
そ完成する、非常に繊細な
絵画であったといえる。

当館では、浮世絵の事を
もっと知ってもらいたいと
思い、浮世絵摺り体験のイ
ベントを実施している。広
重の「伊豫西條」を、黄色

(学芸員・甲斐未希子)
〈8月2回掲載します〉

文化